

【エッセイ部門・最優秀賞】

『風姿花伝』に学ぶアイドル

白百合学園高等学校 第2学年 浦川眞琴

高校二年生の夏にして、初めて好きなアイドルグループができた。これまで音楽番組で見かけてもさほど気に留めなかった彼らだが、最初に母がハマリ、自分もまんまとそれに引きずられてしまった。ポップミュージシャンやロックバンドのファンの経験しかなかった私にとって、メンバー全員の端整な顔立ちやアイドルのコンサート規模、うちわ・ペンライト・ファンサービスの文化、本屋にずらりと並ぶ雑誌表紙の数々、ファンに向けた言葉のチョイス、その他アイドルに関わる全てが新鮮で、圧倒的で、とても魅力的だ。

だが、それと同時に戸惑いも感じていた。私が非アイドルのミュージシャンを推す時は第一に曲が大好き、ミュージシャンがどのような人間であるかは二の次、という感覚を持っている。それゆえミュージシャンがどんな運命をたどっても曲は永久不滅だという安心感がある。ところがアイドルを推す時は顔、性格、発言、周りとの関係性、諸々を含めた人間そのものを愛することになる。そしてこれらは決して不変のものではない。例えば顔の良さが一時のものであるのは過去のアイドルを見れば明らかだし、アイドルは特にグループの解散・脱退・活動休止が激しいように感じる。要するにいつかは無くなるであろうものをこれほど好きになって良いのか、という不安があったのだ。

以上のことを古典好きの母に話してみると、『風姿花伝』をおすすめされた。作者の世阿弥は美少年で当時のアイドルだったのだから読むと面白い、という。少し前に学校で能楽鑑賞をしたばかりだったこともあり、興味本位で現代語訳を入手して読んでみた。そして驚いた。室町時代に書かれた能の理論書のはずなのに、あまりにも現代の芸能、特にアイドルに当てはまるが多すぎる。

『風姿花伝』の中で世阿弥は能の面白さ、珍しさを「花」と表現した。そして次のように言う。「そもそも花というもの、万木千草四季折々に咲くものであって、その時を得た珍しさゆえに愛でられるのである。...いずれの花でも散らずに残る花などあろうか。花は散り、また咲く時があるゆえ珍しいのだ。...一所にとどまらず他の姿に移り行くことが珍しいのだ。」... (①) この部分が先程の不安を抱えた自分に深く刺さった。アイドルの顔の良さは一時であるからこそ、グループがいつまで続くかわからないからこそ、アイドルは「花」があるうちに大量の仕事を全うしている。ならば自分もそれを全力で応援しようではないか。日本人は桜や線香花火など儂いものが好きだと聞いたことがあるが、日本のアイドル人気の根底には儂さに美を見出す心があると思う。『風姿花伝』が書かれてから六百年以上が経ったものの、日本人は変わっていない。

ところで『風姿花伝』では「秘すれば花」の部分が特に有名だろう。秘密にするから花になる。秘事は露見すれば秘密にする程のものではない。だが何も知らない観客の前であれば

思いも寄らない感動を呼び起こせる。これこそが花である、という一節。実は『風姿花伝』を読んだ二日後に、私が好きになったアイドルグループの一人に熱愛報道が出た。アイドルの人気はファンからの恋愛感情による部分が多い。だから「自身の恋愛」は絶対に知られてはならない。必死で隠して、ファンの前に立って、「みなさんの恋人です！！」に徹する。ファンは何も知らない、恋愛関係など無いと思っているからこそ、彼（彼女）らの「愛してる」に落ちるのである。アイドルといえど誰かを好きになるのは人間として至極当然のことだが、その心裏を知ってしまったら「愛してる」もファンには届かなくなってしまう。誰が悪いのか、そもそも事実なのかはさておき、これが「花」が散る瞬間か、と考えてしまった。

しかし、だからといって私は彼の、彼の所属するグループのファンを辞める訳ではない。世阿弥は「花」の流転を説いたが、同時にこうも語っている。「ただまことの花は咲く道理も散る道理も心のままである。されば名望も消えることはない。…物数を究める心が、すなわち花の種となる。」… (②) まずは昔から儂いもの好きの日本人として彼らの時分、つまり一時の花をとことん愛して、それから経験を重ねまことの花が開いていく様子をゆっくりと見守ろう。いつまでも下積み時代の初心を忘れず突き進む彼らに、幸あれ。

〈参考文献〉『現代語訳風姿花伝』著者：世阿弥

訳者：水野聡 出版社：PHP 研究所

〈引用元〉①・②は右に示した本から引用した。

① …87 ページ

② …53～54 ページ